

NEDOエネルギー・地球環境分野成果報告会2026

プログラムNo. 602-1-14

脱炭素化・エネルギー転換に資する我が国技術の
国際実証事業／欧州における水素発電を実現するための
水素ガスタービン発電実証研究（ドイツ）

発表日 2026年7月21日

発表者名 辰巳 康治
団体名 川崎重工業株式会社

連絡先：

川崎重工業株式会社 エネルギーソリューション&マリンカンパニー
池原 威徳(E-mail: ikehara_takenori@global.kawasaki.com)

1. 事業概要

1. 期間

開始 : 2022年2月（実証前調査）／2023年11月（実証研究）
終了（予定） : 2027年3月

2. 最終目標

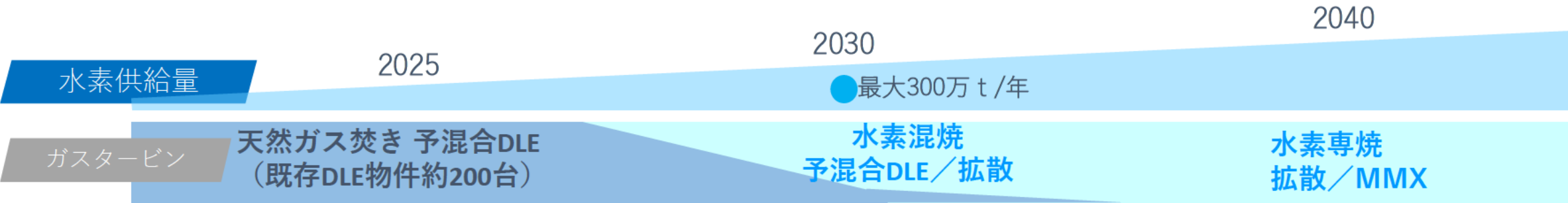
- 当社製30MW級ガスタービン「L30A」に、水素焚きに対応した燃焼器および燃料制御システムを搭載した上で、天然ガスと水素を0～100%の任意の割合で混焼・専焼させて運転し、発電装置としての有効性を確認する。
- 水素混焼・専焼運転時に、サイトにおける有害物質（NO_x, CO）に対する要求値を満足することを確認する。
- 水素混焼・専焼運転時でも、安定燃焼かつ部品耐久性に問題ないことを確認する。

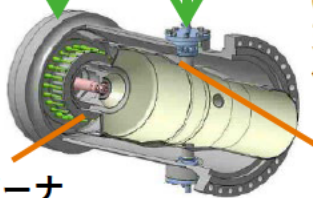
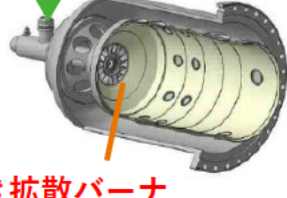
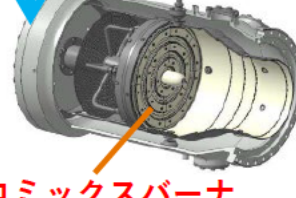
3. 成果・進捗概要

- 水素燃焼対応可能な30MW級ガスタービン発電装置「L30A」を当社国内工場にて製造し、ドイツへ発送。
- 現地子会社および関連工場にて、エンジンを発電装置に組み込む作業を実施し、現地での据付工事を完了。
- 現在、ガスタービン発電装置の試運転準備中。

1. 事業概要：水素ガスタービンの普及戦略

- 水素の普及に合わせ、各ステージに適した各種の水素燃焼器を、シームレスに提供。
- 水素GTメーカーとしての地位確立、水素GTの拡販を目指す。



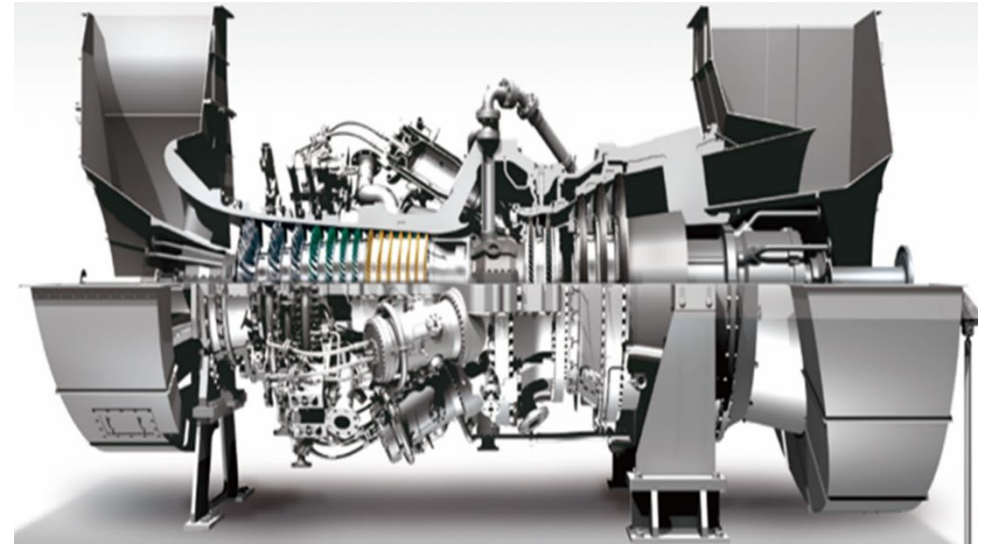
	予混合DLE燃焼器	拡散燃焼器	マイクロミックス燃焼器
概要/ 混焼率	水素/都市ガス  水素混焼 0~30%vol 天然ガスと 任意の割合可 希薄予混合バーナ 追焚きバーナ	水素/天然ガス  水素混焼/専焼 0~100%vol 天然ガスと 任意の割合可 水素焚き拡散バーナ	水素  水素専焼 50~100%vol 開発中 (一部機種で 開発完了) マイクロミックスバーナ
燃焼方 式	希薄予混合+追焚き燃焼：ドライ方式	拡散燃焼+水噴射：ウェット方式	微小拡散火炎：ドライ方式
長所/ 短所	長所) 天然ガス焚き発電装置と同じ燃焼器 既設設備を有効活用して水素使用が可 能。 短所) 水素混焼率が30%に制限される為、 CO₂削減量が小さい。	長所) 水素・天然ガスを任意に混焼可能 経済性・環境性の両立可能なフレキシ ブルなシステム 短所) NOx低減に水が必要で、発電効率・排 ガス特性はドライ方式に劣る。	長所) 開発中。本格的な水素社会におけ る主流になりうる。 短所) 現時点で、天然ガス専焼が困難と 予想している。

2. 事業の位置付け、必要性：事業の目的

- 当社製30MW級ガスタービン発電設備「L30A」に、水素焚きに対応した「拡散燃焼器」（ウェット方式） および燃料制御システムを搭載。天然ガスと水素を0～100%の任意の割合で混焼・専焼させて運転し、発電装置としての有効性を確認する。
- 水素混焼・専焼運転時に、サイトにおける有害物質（NO_x, CO）に対する要求値を満足することを確認する。また、安定燃焼かつ部品耐久性に問題ないことを確認する。



水素ガスタービン発電所



実証に使用する 30MW級水素ガスタービン L30A

2. 事業の位置付け、必要性：現地サイトの状況

- パートナーであるRWE Generation社の「エムスラント発電所」にL30A水素発電装置を設置
- 水素は再エネ電力による電解水素を利用

H2GT

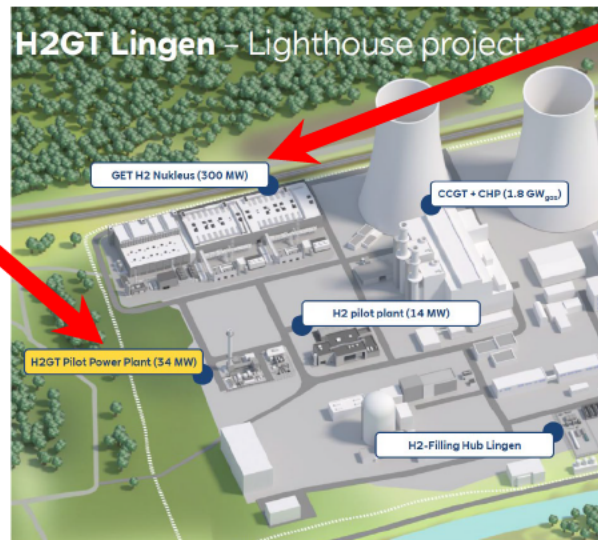
水素ガスタービン発電実証研究

実証研究概要

グリーン水素を燃料とする30MW級当社製ガスタービン「L30A」を運転し、運転データの収集と運用特性の確認等を行う。

実証サイト

ドイツ・ニーダーザクセン州リンゲン エムスラント発電所
(RWE社の水素プロジェクトであるGet-H2 Nukleus プロジェクトの実施地)



Energy Hub Lingen | RWE

Get-H2 Nukleus

Lingen水素プロジェクト

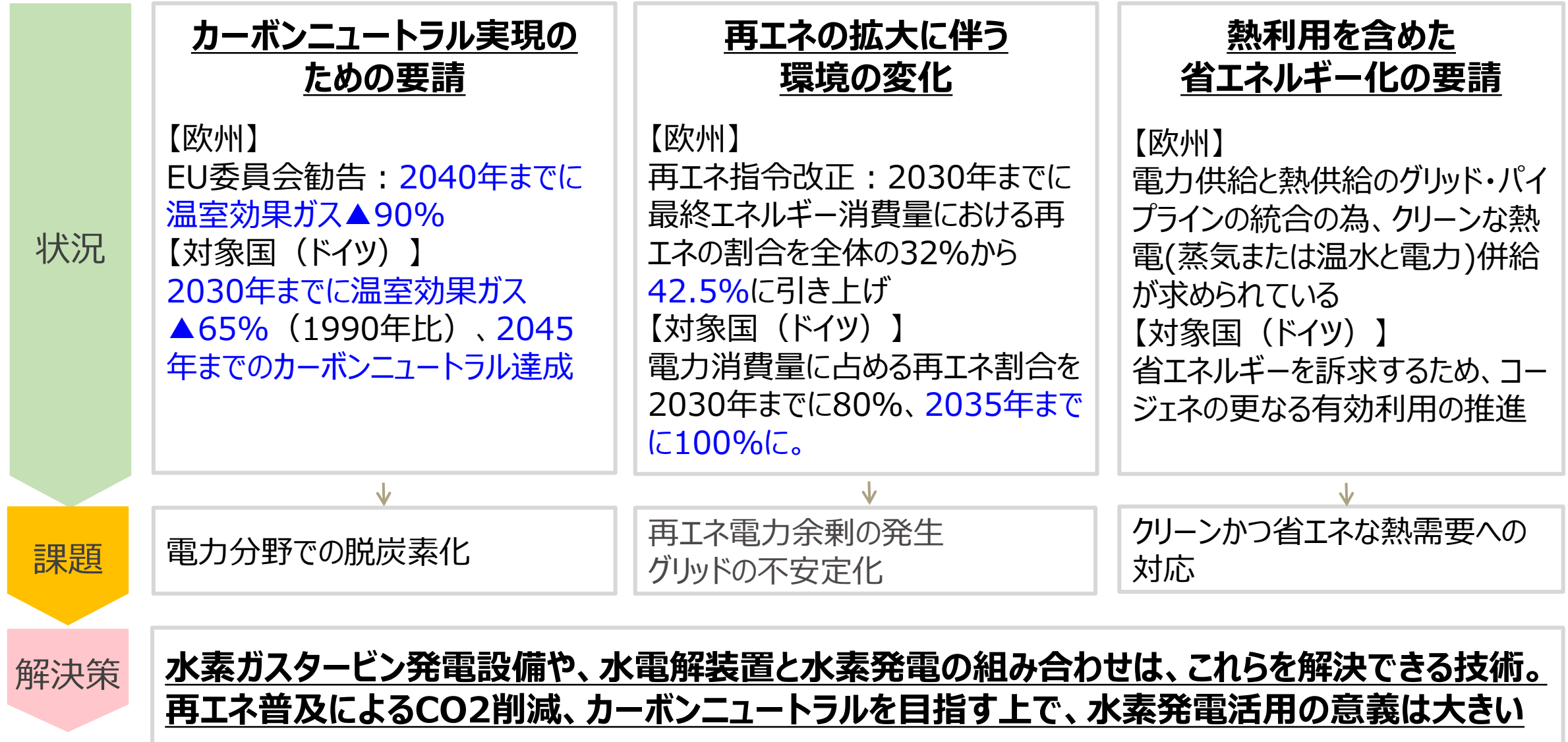
RWE社のプロジェクト。風力余剰電力で水電解装置（100MW×3台）からグリーン水素を製造し、製油所等と結ぶ水素パイプラインへ供給する計画。

H2GTでは、水電解装置で製造された水素を利用する。



2. 事業の位置付け・必要性：本事業の位置付け（1/2）

- 欧州のカーボンニュートラル実現・再エネ拡大に向けての課題に対する本事業の位置付け



2. 事業の位置付け・必要性：本事業の位置付け（2/2）

- 日本のカーボンニュートラル実現・再エネ拡大に向けての戦略、本事業の意義・必要性

状況

我が国の水素戦略

2023年6月に改訂された我が国の「[水素基本戦略](#)」では、水素需要面での取り組みとして[発電分野](#)が挙げられており、「エネルギーの安定供給を確保しつつ、火力発電からのCO2排出量を削減していくなど、カーボンニュートラルに向けたトランジションと脱炭素社会を支える役割が期待される」と位置付けられている。さらに、水素基本戦略に記載のある「[水素産業戦略](#)」において、[市場の立ち上がりが相対的に早く、市場規模も大きい](#)と考えられる分野、[日本企業が技術的優位性を持っている](#)と考えられる分野という二つの観点から選ばれた9分野の一つに[脱炭素型発電](#)が挙げられており、[重点的に取り組むべき分野](#)とされている

意義・必要性

本事業の実証研究や普及の実現は、以下に挙げる社会的意義を持つ。

- ① 実証研究を行うことで、[水素ガスタービンの国内実装に向けて技術的ノウハウが蓄積され、民間事業者の事業体制が強化される](#)
- ② 本事業の実証研究から普及への展開によって、[我が国事業者の海外における事業機会が拡張される](#)。

3. 研究開発マネジメントについて：研究開発の目標

➤ 研究開発の目標

安定運用

天然ガスと燃焼特性が大きく異なる水素燃焼においても安定運用を実現すること

- 定格発電電力が計画値以上であること
- 定格発電電力における燃料消費量が計画値×1.05以下であること
- 水素混焼率0%, 25%, 50%, 75%, 100%（体積割合）での運用において、出力変動等なく安定していること

環境要求への適合

水素は燃焼温度が天然ガスに比べ高く窒素酸化物排出量が増加する傾向にあるが、サイトの環境要求に適合すること

- 窒素酸化物(NOx)排出量、および一酸化炭素(CO)排出量について、現地当局が定める規制値を満足すること

耐久性

水素は燃焼速度が天然ガスに比べて速いため部品温度上昇や異常燃焼等が発生しやすいが、水素特性に対応設計した部品が適正な耐久性を有すること

- 燃焼器部品温度、燃焼振動が当社基準以下であること
- 実証運用後のガスタービン内部部品状態が当社基準を満足すること(目視点検)

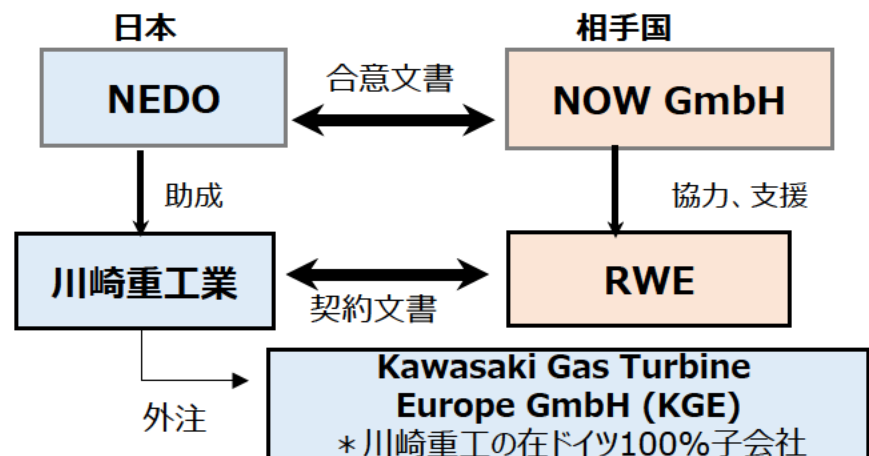
3. 研究開発マネジメントについて：スケジュール & 実施体制

➤ 実証研究のスケジュール

	FY2023	Mar.	Apr.	FY2024	Mar.	Apr.	FY2025	Mar.	Apr.	FY2026	Mar.	Apr.	FY2027
全体工程	実証研究 開始 ☆											実証試験	フォローアップ
エンジン製作（国内）						☆出荷済							
発電装置製作（ドイツ）							☆出荷済						
据付工事											☆完了済		
試運転(cold/hot commissioning)													

日本国内でのガスタービン本体での組立、ドイツ子会社でのガスタービン発電装置製造、ならびに現地据付工事が完了。
今後、再エネ由来の水素を使用しての試運転、実証試験を予定。

➤ 実施体制



【業務所掌】

川崎重工業：水素ガスタービン本体及び発電装置の全体計画・とりまとめ、設計、製造、現地輸送、フォローアップ事業の実施等

RWE：水素ガスタービン発電所の全体計画、設計、土木、燃料・電気工事等

KGE：水素ガスタービン周辺機器及び発電装置のパッケージ製作、現地輸送、据付・試運転 等

4. 研究開発成果について：現地据付工事（2025/10～）



水素ガスタービン関連装置



水素・天然ガス
混合装置

安定化電源
制御室

ガスタービン煙突

水素ガスタービン発電装置

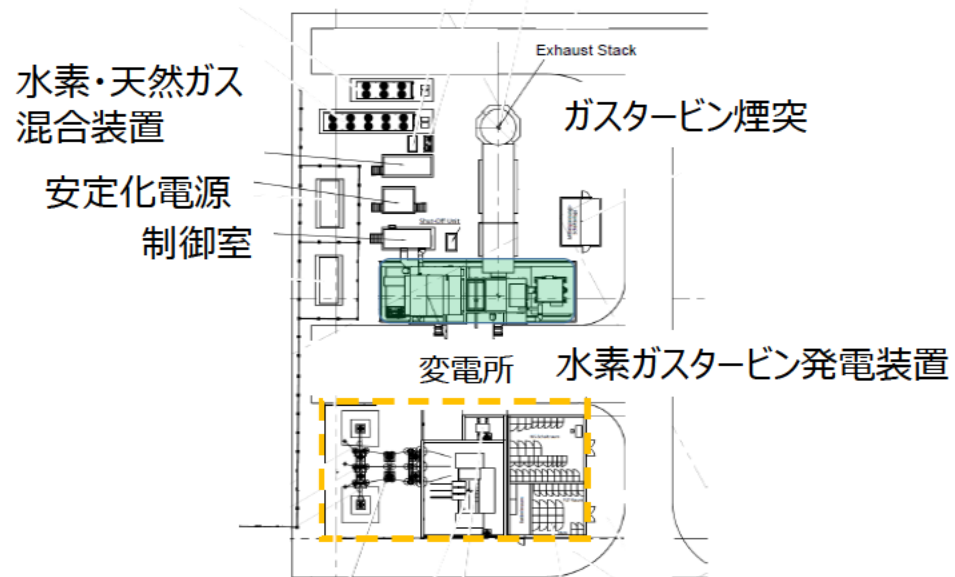
変電所

水素ガスタービン発電装置本体

水素ガスタービン発電所 レイアウト



4. 研究開発成果について：現地据付工事完了 (2026/3)



水素ガスタービン発電所 レイアウト

水素ガスタービン発電装置 本体



5. 今後の見通し

- 本実証研究での実績を礎に、ドイツ、さらには欧州での30MW級水素焚きガスタービン普及を目指し、カーボンニュートラルが求められているエネルギー市場を開拓する。
- 水素供給者・電力事業者と共同歩調を取り、水素ガスタービン発電普及を計画する。
- 水素社会に至るまでの過渡期は、水素の供給量、価格が不安定な期間が予想される。水素・天然ガスの混合量を任意に変えられる設備である事を実証し、過渡期における水素供給不安を払拭。水素発電の早期事業化に結び付ける。
- 実証期間終了後に、予混合DLE燃焼器に転換しての水素混焼検証、およびマイクロミックス燃焼器を用いた水素専焼・混焼検証を行うことを計画中。
- 世界的な化石燃料回帰、ならびに政権交代によりドイツのエネルギー政策が見直されつつあったが、2025年10月には水素インフラの構築加速を目的とした「水素加速法」が内閣承認された。また、本年1月にはドイツの発電所戦略（StromVKG: 電気の供給の確保及び能力に関する法律）について欧州委員会との間で基本合意。StromVKGによるオークションでは2045年に脱炭素化を実現させる事が要件になっている。脱炭素に関する水素発電の重要性は変わらないと考え、プロジェクトの完遂・当初目的の達成に向けて最善を尽くす。